無限の星空

文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限の星空

【Ｎコード】
Ｎ４４９６Ｎ

【作者名】
文

【あらすじ】
――大人気オンラインゲームｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍ。
新規登録者である火野上（ひのうえ）　炎（れん）は街を散策中、黒ずくめの《何者か》にプレイヤーが襲われているのを目撃してしまう。
その日から平凡な日常が少しずつ変わり始める。現実とゲームを巻き込むファンタジー物語。
――――始まります。

プロローグ

大人気オンラインゲーム。「ｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍ」。爽快かつアクティブな戦闘、リアルな街並みゲーム内で風が吹けばゲーム内の木や草、プレイヤーやモンスター達の髪の毛が揺れる。魔法やスキル、職業も豊富でこれも人気の一つ。そして豊富な動作アクション。恋人システムに結婚システムなどもあったりするらしい。しかし魔の手は着実に進み始めていた。

最近、やたらとニュースで騒がれている。意識不明患者の増加。いずれの患者の共通点、それはいずれもｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍのプレイ中の出来事であったらしい。
警察やゲームの管理者達は本格的に調査を開始、しかし手がかりどころか警察参入中には何も起こらない。
つまり人為的に行われている可能性があると言うことになるらしい。
依然調査中のこと。
それにも関わらずｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍの人気は止まることを知らず新規登録者は増える一方だった。
そして今。
一人の少年が新規登録したところから運命は変わり始める。

ｅｐｉｓｏｄｅ？　第一話　動き出す者達

ここは火野上家。
ここの一人息子は今まさに幸せの絶頂にいた。
「やっほー！！キタキタ！やっほー！」
両親のパソコンで応募した抽選に当たり今日、その商品が届きそれを手にした少年は一人盛り上がっていたのであった。
「えーっと・・・ここをこう接続して、こうすれば・・・うし！！電源よし、後はインターネットに繋ぐだけだな」
開いたホームページ。
炎(れん)はなんの迷いもなくｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍのページに行き新規登録を済ませた。
「ハンドルネームは・・・うん炎って確かホムラって読むから・・・炎(ほむら)がいいな」
確認ボタンを押しゲームを押しゲームをインストールを開始した。
インストールが完了しゲームが始まる。
まず驚いたのは参加者人数。日曜日ってこともあるのか軽く千人を越えている。そして魅力の一つ。それはこのオンラインゲームのサーバーは一つだからみんな同じサーバーだからすごく盛り上がるのだ。
さっそくキャラクター登録し職業は前から決めていたアーチャーに設定した。

降り立ったのは始まりの街「ソルティア」。始めてニ、三ヶ月のプレイヤーまでがだいたいここを拠点に多種多様な依頼をこなしたり仲間、つまりパーティーを探したり、街の周りでレベル上げなどをしている。
「・・・すごいな」
絶えず流れるチャット欄。何かを言えば誰かがすぐに返事をくれる

正にそんな感じだった。
画面内で吹き抜ける風。
揺れる草木。
まるでプレイヤー自身がそこにいるかのように思わせる。
炎は仲間を探しに街の裏路地に来ていた。
「だいたい強い人はこう言う場所に隠れてるんだよな。うし、探すか！」
ふと暗がりで何かが動いたような気がした。
炎は何気なくそちらに赴きそしてあらぬ者達を見てしまった。
身の丈ほどある大鎌を背負った黒いローブを羽織り顔はフードを深く被っていて顔は見えない。
そしてその鎌を構え刃をプレイヤーに向けた。
シュッ。
風を切る音ともにローブを着たプレイヤー？は鎌でプレイヤーを切り裂いた。
そしてゲームのはずなのに赤い血が辺りに飛び散りプレイヤーはその場に倒れ込んだ。
「・・・うわ。うわぁぁぁぁあ！！！」
炎は画面上に映し出されるリアルな血、恐怖のあまりエリア内チャットを誤送信してしまった。
黒いローブのプレイヤーはこちらを向きニヤっと笑い今度はこちらに歩み寄ってきた。
炎は慌ててログアウトをしてパソコンの電源を消し恐怖のあまり布団に潜り込んだ。

そしてこの出来事から俺の運命は変わることになる。現実が仮想（ゲーム）になり。
そして仮想が現実になる。

第二話　夢の中　現実

気がつくとそこにいた。
画面上に見ていたｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍの街並み。
並ぶ家の窓に映し出された自分の姿は自分で作ったキャラクター。
風を感じる。
チャットが文字でなく声で聞こえる。
「な、なんだよ。なんなんだよこれ！！」

明らかに挙動不審な俺は直ぐにシステム監視者の目に止まったらしい。
気がつくと三、四人に囲まれていた。「そこの不審プレイヤーに告ぐ！！直ちに投降しＩＰアドレスを検査されたし」
「ま、待ってください！！俺も何が起きてるか分からなくて！！」
必死に声を出すがシステム監視者から見たら俺の声はおそらくチャット欄に文字として変換されているのだろう。
しかし驚いたことにプレイヤーそれぞれ声が違う。
「タイピングスピードが随分早いな。ヘビープレイヤーの可能性がある。プログラムを改ざんしている場合もありうる！！慎重に対応しろ」
じわりじわりと距離を詰めてくる。
ログアウトをさせないために網状の専用捕獲ツールを投げつきてきた。
その時、誰かが俺の前に立ち塞がり風を切る音共に網を切り裂いた。
「君！！こっちだよ！」
俺の手を掴みシステム監視者を薙ぎ倒しながら進む・・・どうやら女の子のプレイヤーに連れ込まれ裏路地の一角にある廃家にいた。
「ここまでくれば大丈夫、さて、君が誰だか教えてもらおうかな？」
ドアを閉め女の子はまじまじと顔を近づけてくる。

俺は若干後ずさりしながら答えた。
「分からない。俺だって知りたい！！」
その時壁に掛けられたあの黒いローブが目についた。「その声・・・やっぱりあの場所にいた子だね？」
「・・・そうだ、っと言ったら？」
「そうね・・・見られたからには生きては出さない」すると薄暗い廃家の中、徐々に目が慣れてきて段々と少女の全体像が見え始めてきた。
そして少女が背負っていたあの大鎌を構えた。
ザク。
鈍い音ともに反射的に腕で顔を隠す。
「・・・あれ？」
痛くない、それどころかあのプレイヤーみたいに血すらでていない。
「あはは！！驚いた？」
「へっ？」
「大丈夫、君が見た光景。ちゃんと理由があるの、今の状況も合わせて順番に説明するけど大丈夫？」
「・・・まず、その鎌をどうにかしてくれ。怖すぎます」
少女は慌てて鎌を背中に戻し話を始めた。
「私は姫鬼（ひめか）。ん～一応ハンドルネームってことを言っておくね。君の名前は・・・？」
「そう言えばいつもなら頭上にある名前がなくなってるんだよな。俺はほむら。炎って書いてホムラって読む。さっ今の状況教えてくれないか？ログアウトもできないしそれに正直お前のことも信用できない」
「当たり前だよね。まず誤解から解いていきましょうか。まずあなたが見た光景のことね。彼も私達と同じ状況だったプレイヤー」
「俺とお前の他にいるのか？この・・・ｗｉｎｎｉｎｇ ｄｒｅａｍの世界に来ちゃった人達が・・・！」
姫鬼はうなずくと話を続けた。

「私も詳しいことは分からない。知ってるかな？ｗｉｎｎｉｎｇｄｒｅａｍのプレイヤーが相次いで意識不明の重態で入院してること」
「そう言えばニュースで見たことあるような」
「どうやらその人達みんなこの世界に来てしまった人達。またはこの世界でデリートされてしまった人達だと私は踏んでいる」
「待て！！じゃあなんであのプレイヤーを斬った！なんで血が出た！」
「簡単よ。おそらく私達はこの時もデータの体から実態に変換されている。つまり魔物に攻撃されれば血も出る。そしてネット上のウイルスに感染もする」
「・・・つまりあんたはこれ以上ウイルスの感染が広がらないためにも？」
「・・・うん。この鎌はね睡夢の大鎌って言って斬った瞬間にその対象を眠らせることができるの。でね？プレイヤーには確実に効くことはギルド戦で知ってたからウイルスで苦しんで死ぬよりは強制的にログアウトさせたの」
「つまり、あのプレイヤーは無事なのか？なら俺も！！」
「ううん。生きてはいるけど意識はない植物人間。多分大元を断たない限り目は覚めないと思うの」
「そうか・・・なら、ならお前はなんでウイルスに感染しない？あんな至近距離、空気感染だろうが血液感染だろうがうつるものだろう？ネットだから知らないけどウイルスって物は」
「これのおかげ」
少女は何か俺に渡した。
それはなにか携帯電話みたいな端末。
「・・・これは？」
「デヴァイス・・・ステータスとかレベルとか自分の情報が見えたり魔物達の攻撃から身を守ったり、それがなきゃこの体じゃ戦えない。もう一個あるからあげるね」

「これを・・・どこで？」「・・・・」
姫鬼は黙り込みうつむいてしまった。
「・・・ったく！戻る方法はなんか怖いし確かじゃない！！仕方ない、命の恩人なんだあんたは。借りは返す。行こうぜ？」
うつむいていた姫鬼は顔を上げニコッと笑うと俺が差し伸べた手を握り立ち上がった。
そして外に出た。
外は明るい。
だが向かう先は多分真っ暗、だけど進む。
なぜが進まなきゃいけない気がする。

「・・・イレギュラーはどうした？」
「残念ですが・・・」
「仕方ない。アレを放しイレギュラー達を殲滅せよ」「しかし普通のプレイヤー達は？」
「一時的にログインを禁止すればよかろう」
「はっ！でわ準備に取りかかります！」
どこかは分からない空間。立派なヒゲをたくわえた男性は絶えず流れるｗｉｎｎｉｎｇ　ｄｒｅａｍの画面を眺めている。
「もうすぐだ・・・！！今回の殺戮イベント。生き残った者達こそ次なるステージにいけるのだ！！」
男性は立ち上がり笑っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4496n/

無限の星空

2010年10月8日13時17分発行